

ケルト学者の平島直一郎氏が県立大で特別講義

News

山口県立大学で11月の17日と18日の両日、ケルト学者の平島直一郎氏(福岡在住)を招いてアイルランドの問題、ケルト文化に関する特別講義が行われました。同氏は早大文学部卒業後、10年におよぶドイツ留学(フライブルク大学)の経験があり、その間、ケルト文化の研究を始め、アイルランドも幾度か研究訪問しています。帰国後は、翻訳・著述業を行いつつ、ケルト文学の研究を続け、昨年は、創元社から「ケルト辞典」という訳書を出版しています。

平島氏は17日午後、国際文化学部の国際関係論の講義で「ケルト文化から見たアイルランド」と題する講義を行い、夕方ケルトに関心を有する学生を交えた懇親会に参加し、さらに翌18日も専門ゼミを担当してくださいました。

EU各国商務官福岡研修ミッションに参加

Report

2002年11月28日夕方、福岡EU協会が企画・開催したEU諸国商務官との意見交換会および懇親会に、岩田会長に代わり山口EU協会を代表して参加してきました。福岡EU協会は本年6月に設立されたばかりで、今回のこの行事が実際上の設立記念行事のような位置付けとなっていました。

市内のホテルの会場において、駐日EU代表部のミハエル・プルヒ参事官(貿易・商務担当)をはじめ、EU各国大使館からの商務官(コマーシャル・アタッシュ)が一同に会し、福岡の企業との意見交換会が行われました。引き続き、別会場で懇親会が行われ、和やかな雰囲気の中、福岡県副知事やデンマーク大使館公使のスピーチなどを織り交ぜ、参加者間の交流が図られました。

懇親会の最後に挨拶に立った福岡EU協会橋田紘一幹事長(九州電力常務取締役)は、EUの統合深化の試みは、同じく一体化を進めようとする九州にとって大いに参考となるとした上で、今後、山口、佐賀、大分のEU協会との密接な連携のもと、大いにEUとの関係を強化していきたい、また2003年度の秋には近隣のEU協会と合同で100人規模のミッションをEUに派遣する計画である旨、高らかに宣言しました。

この会合は、実際には二日間にわたる行事の一部であり、本会合の前にEU諸国の商務官たちは昼食懇談会、福岡市内視察を行っており、また一泊した翌日は、トヨタ自動車、安川電機などの九州企業視察、福岡県知事と福岡市長への表敬訪問の予定となっていました。地方においても自国の広報宣伝と情報収集活動をしたいEU諸国側の要請と、EUビジネスの存在を身近に感じてもらう機会を求めた福岡の主催者側の思惑が見事に一致する行事でした。

懇親会においては、福岡EU協会の榊原英夫専務理事、田辺義子事務局長とも初めて意見交換の場を持つことができました。(文責:小川秀樹)

(参加国はデンマーク、ギリシャ、イタリア、オランダ、オーストリア、ポルトガル、フィンランド、スウェーデン、英国の各国)

おしらせ

山口EU協会

山口EU協会主催のEUフォーラムのご案内

2003年1月21日(火) 県立大学講堂

山口EU協会では、2003年1月21日(火)午後4時から県立大看護学部講堂において「今、EUから学べること—新しい挑戦を続けるヨーロッパ」を開催します。基調講演者としてJETROで海外駐在・調査経験が豊富で、ワークシェアリング等、今話題のオランダモデルについての論客である長坂寿久拓殖大学教授をお招きし、その後パネルディスカッションと簡単な懇親会を予定しています。なお、フォーラム終了後の懇親会には、山口EU協会会長である岩田啓靖県立大学長をはじめ、フォーラムに参加のパネリストの方を含め、その他の関係者約30名が一同に会する予定となっております。ご期待ください。

お問い合わせ 電話 083-928-3543 E-mail hogawa@ypu.jp

2月に下関でEUトーク

山口県国際交流協会下関分室グローバルサロン(海峽メッセ内)

山口県国際交流協会下関支部は、毎日曜日に「サンデーインターナショナルトーク」と称した集まりを開催しています。

2003年2月23日には、県立大EU研究会の小川秀樹氏(県立大助教授)が「日本がEUから学べること」と題してEUについてお話をすることになっています。場所は海峽メッセ403号の同協会下関分室グローバルサロン内。

お問い合わせ 電話 0832-31-5770

「外交フォーラム」誌で 県立大国際文化学部および山口EU協会を紹介

2002年12月12日、県立大国際文化学部の国際関係論研究室に対して「外交フォーラム」誌(都市出版)の取材があり、その内容は2003年2月号に掲載予定です。同誌のなかで毎号2ページにわたり各大学の国際関係のゼミが紹介される巻頭グラビアにおいてです。

主として国際関係論研究室の取材でしたが、学内の国際情報資料センターや山口EU協会の活動も紹介されます。

会報の愛称 募集中

現在、山口EU協会事務局では、当会報の愛称を募集しています。山口とEUのイメージにふさわしいニックネームを奮ってご応募ください。

[応募方法] メールで送信してください。件名を「会報タイトル応募」とし、本文に、タイトル、氏名、連絡先をお書きのうえ、hogawa@ypu.jp 宛にお送りください。

発行 山口EU協会事務局 山口市桜島3-2-1 山口県立大学内 電話 083-928-0211

2003.1

山口EU協会会報

No.1

YAMAGUCHI EU Association

山口EU協会事務局 山口市桜島 3-2-1 山口県立大学内

もくじ

- 1 県立大学内に資料センターが完成
- 2 EUの国フィンランドで描いた夢
- 3 多文化社会イギリスに生きる人々
- 4 平島直一郎氏が県立大で特別講義

山口EU協会会報発行にあたって

山口EU協会事務局を私たち山口県立大学でお引き受けすることに決まってから随分と時間が経ってしまいました。八木宗十郎前会長の御配慮を生かすためにも、大学内の態勢や人材、施設などに種々の工夫を重ね、将来ともに安定したヨーロッパの情報センターに成長していくようあれこれと考えております。

この度、大学の有力な中堅教員のグループが大学内部に「EU研究会」を立ち上げ、EU協会と連携しているいろいろ面白い企画や活動を展開できる態勢が整いました。新年度(平成15年)から皆様方へ実質的なサービスを提供する段取りになっております。また山口EU協会のホームページの設計も終わりました。

どうか、改めてEU協会のメンバーシップを御確認ください。旧倍の関心と親近感をお寄せいただきますように、伏してお願い申し上げます。(山口EU協会会長 岩田啓靖)

山口EU協会と県立大のEUシフト 2003

山口県立大に2002年9月から半年の予定で、フランスのポワチエ大学経営大学院のトランシュパン(Tranchepain)氏を院生インターンで招いています。同氏はストラスブルで工学修士号を修めた上で、現在、ポワチエの経営大学院に籍を置いています。

夏期休暇に多文化資料室の改装が行われ、10月から国際情報資料センターとして稼働を始めたのと同時に、氏も付設のオフィスで業務を始めました。早速英文版HPの作成に取り掛かり、またEU協会個人会員の社会人に対してフランス語による異文化交流会(毎週金曜日)を開始しました。国際業務支援の一環としては12月中旬にヤナギヤ(宇部市)に派遣され、フランスからの商談ミッション受入に際して、そのお世話をすることもしました。

ところでこのポワチエ経営大学院は日本でインターンを希望する院生を毎年数名派遣しています。その責任者が日本の経営を専門とするジャック・ジョソー(Jacques Jaussaud)教授でしたが、2002年秋にポー大学に移られました。ポーはピレネー山脈に近く、フランス側のバスク地方にあります。バスク地方のスペイン側は言うまでもなくフランスコ・サビエルの出身地です。ジョソー教授は県立大との関係構築に前向きな姿勢で、県立大もその可能性を追求していく計画です。また、ポー大学が提携しているナバラ公立大(スペイン)との三者提携も考えられます。

News

県立大学内に国際情報資料センターが完成

山口EU協会が1990年に設立されてからすでに10年以上が経過しました。昨年夏には組織上大きな変化があり、事務局が商工会議所から山口県立大学へ移転し、県立大学長がEU協会の会長を務めることとなりました。それを受けて県立大内では、学長企画室内のEU研究グループのメンバーを中心に、山口EU協会の舵取りをどのように行ってゆか、鋭意検討を重ねてきました。

その結果はすでに県立大内で目に見える成果として表れています。本学キャンパスC館4階の多文化資料室が改装され、新たに国際情報資料センターおよび付設事務室として生まれ変わりました。事務室では早速、フランスから到着しているインターンの院生に仕事を開始してもらいました。

国際情報資料センターの方は順次、EU委員会より提供される資料に加え、国際協力プラザとして外務省や経済協力関係の資料が揃えられる他、国際機関、NGOの資料なども充実させて公開してゆきたいと考えています。

今後の予定ですが、以下のような活動を開始します。

- 1 会報の発行
- 2 会員のメールアドレス整備、メーリングリストの作成
- 3 ホームページの作成
- 4 シンポジウム、セミナーの開催
- 5 ヨーロッパ・ミッションの派遣

とりわけ4につきましては、本号の4ページにありますように、11月19日に県立大の国際関係論の講義にケルト学者の平島直一郎氏を福岡からお招きした他、来年度は同ページで紹介するように長坂寿久拓大教授を基調講演に招き、パネルディスカッションも加え、少し大きな規模のセミナーを開催する予定です。講師の長坂氏は海外経験が豊富で、特にオランダ事情に詳しく、ワークシェアリング、安楽死等、巷で話題の問題にも踏み込める論客であり、かつJETRO出身だけに企業人の関心も理解できる立場にあります。

以上のような活動を皮切りに、2003年度以降はさらに活発に活動を展開してゆく所存ですので、皆さまも是非とも山口EU協会の活動に積極的に関わっていただけますようお願い申し上げます。

(岩田 啓靖)

フィンランド

EUの国フィンランドで描いた夢

客員教授としてヘルシンキ芸術デザイン大学大学院に派遣されて

山口県立大学教授 水谷 由美子

Feature

桜が満開の山口から、まだまだ真冬のコートが必要とするフィンランドに旅立ったのは、2002年4月7日でした。2000年の夏に山口県立美術館が公式にヘルシンキ市立美術館と交流を開始し、「雪舟とその弟子展」が当地で開催されました。筆者にとってのフィンランドとのご縁もこの時以来で「やまぐち文化発信ショップ Naru Naxeve」の産・官・学連携事業の一環として、筆者の大学院ゼミ生とともに、雪舟Tシャツを開発し、当展示会のミュージアムグッズとして、販売してもらったことがきっかけでした。

販売実現の交渉のほとんどは、インターネットを通じて行われました。約1ヶ月という短時間に、このプロジェクトが実現されたのも、時差や経済性を乗り越えられるインターネットがあったおかげです。フィンランドは、普及率でも世界のIT最先端国として有名です。そして、こうした背景のもとで、ヨーロッパにおけるデザイン教育の先端を行くヘルシンキ芸術デザイン大学(以下UIAHと記す)があります。

筆者は、東京財団の「教員の海外派遣」制度により、約半年間、上記大学大学院ファッション・テキスタイルデザイン研究科に客員教授として滞在する機会を得ました。

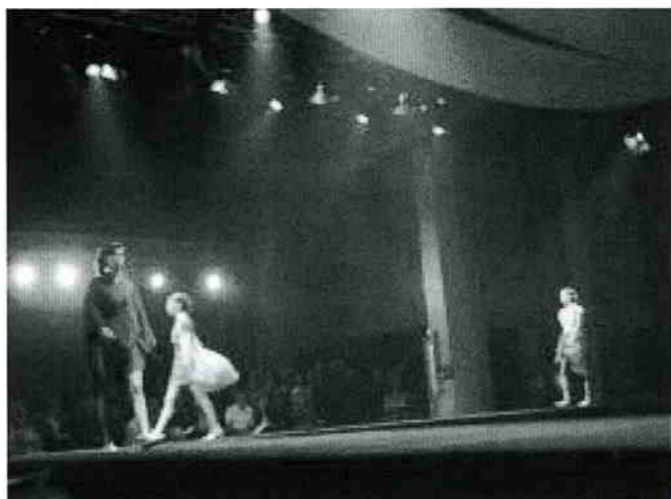
2001年の秋から教員としての派遣ということで、現地では授業を実施することになっていましたが、使用言語が英語可とうことで、ひとまず安心しました。実は、フィンランドはEUに参加し、学部では国語(フィンランド語)で、そして大学院では英語で授業が行われることが多くなって来ています。北欧全般にそうですが、街のほとんど至る所で容易に英語が通じます。これはラテン系の国とは対照的ですが、通じると言っても、日本文化を英語で説明するのは容易ではありません。

筆者はピエツパ・ラツパライネン教授の授業「衣服に関する民俗、エコロジーそしてデザイン」に参加しました。そこで、服飾美学の立場から日本の着物の歴史性や美意識について授業を行ったのですが、日本の古代から近代までの着物について馴れない英語で説明するのは至難の業で、それを補うための視覚資料の作成には多大な時間を要しました。

服飾デザインの立場からは、日本のファッションデザインについて、ジャポニズムの視点から分析し、現代ファッションデザインを紹介しました。また、筆者がこれまで企画してきたプロジェクトで実施したファッションショーをビデオで紹介しました。さらに、UIAHと山口県立大学の学生交流をも計画し、大学院国際文化学研究所のゼミ生(高島海、山崎忠道)2名を、UIAHの卒業・修了制作発表としてのファッションショーに参加させました。現地大学の学生の中にはすでにプロとして活躍している学生も多数混じっており、モデルもプロということで、彼らはかなり刺激を受けたようでした。一方、彼らの作品も現地の人々に高く評価され、ほっと一安心でした。

また、現地の学生さんには実習授業において、いろいろなアドヴァイスをするなど、有意義な指導・交流が実現できたことは幸いでした。また、工場見学や博物館見学を通じて、当地の民俗文化や最先端の技術に触れることができ、今までに知らなかった北欧の実態を理解できたことは非常に有意義な体験でした。

フィンランドがEUに参加したことで、生活面ではスーパーマーケットやデパートの開店時間が拡大するなど、ヨーロッパの競争社会に突入し、経済力が向上しています。これはマーケットの広がりによってもさらに助長され、ノキアに代表されるIT企業や、1960年代からフィンランドを代表するテキスタイル・ファッションメーカーであるマリメッコは、今日の世界経済の低調とは関係がないかのように、急成長を遂げ、まさに、フィンランドの繁栄を象徴しています。



ヘルシンキ芸術デザイン大学のファッションショーに参加した高島海(山口県立大学大学院国際文化学研究所2年)の場面

EUメンバーになったフィンランドは経済面ばかりでなく、教育の現場でも積極的なEU圏の連携が進められています。特に、UIAHの学長ユリヨ・ソタマ氏の発案で、従来の学部における交換留学プロジェクトを発展させた、EU圏内の各芸術デザイン系大学院をネットワークで結ぶ交換留学制度がこの数年、実施されて来ました。ソタマ学長はこのネットワークと日本の芸術デザイン系大学とを結びつけるという広大な計画の急速な実現を目指しておられます。

山口県立大学において筆者の属している学部は芸術デザイン系ではありませんが、大学院進学と、こうしたヨーロッパの大学連携への留学などを結びつけ、学生に留学の機会を与えることができれば、グローバルな視野を持ち、地域で活躍できる人材が養成できるのではないかと夢をフィンランドで持つことができました。是非とも、周囲の理解を得て、世界とのネットワーク作り而努力したいと考えてます。

イギリス

多文化社会イギリスに生きる人々 学生の観たイギリス

山口県立大学助教授 岩野 雅子/ 国際交流員 ロバート・クーパー

Report

この秋、学生18名とイギリスへ10日間のスタディーツアーに出かけました。経済成長と福祉サービスとのバランス、市民型社会の進展、市民ボランティアの活動、女性の政治経済界への進出、そして多文化社会としてのイギリス。そんな多様で変動的なイギリスを見てみよう、18名それぞれが個別のテーマで自主学習をして渡英しました。まず訪問したのは、1572年に創立された男子校。詩人、小説家、芸術家、王室関係者、そしてチャーチルをはじめとする7人の首相を送り出しています。ハリーポッターのシーンもここで撮影されました。13歳から18歳までの全寮制に驚いていると、案内をくださった女性スタッフの娘さんは5歳から全寮制学校に通っていると聞き、そのような環境で成長していくイギリスの特定階層の意識や態度はどのようなものであるかと話し合いました。国会議事堂内では国会議員が歩き回る中で上院と下院を見学してもらい、女性議員が25%を占める状況を想像することができました。

アフロアラビアン系イギリス人が多く住む地区で活動しているNPOを訪問したときは、「来るものは拒まず」の精神で、行政サービスの隙間をカバーする専門職員とボランティアの行動に考えさせられました。また、ユダヤ系コミュニティの幼稚園と老人ホームでは、マイノリティが助け合って文化を守り、人々を支える精神を学びました。インド系イギリス人のコミュニティでは、新年を祝うためにサリーで着飾ってイギリス中から集まって来た人々が、自分たちの力で建設したヒンズー寺院に向かって閑静な住宅街の中を歩く姿に圧倒されました。大学では、EU内の交換プログラムで学ぶ多くのヨーロッパ人学生を見かけました。斜陽化から立ち直り、サービス業を中心に活気と自信を取り戻したイギリス。そして、そこで生きる人々はみな自分が何を言いたいのか、何をしたいのかがはっきりしているように感じられました。それが、学生たちの観たイギリスでした。

Greater London Assembly ミレニアムブリッジを手がけた建築家、ノーマン・フォスター卿がデザインした11世紀の伝統的建造物ロンドン塔の真向かいに立ち、論議を呼んでいる



振り返って、日本社会で生きる私たちはどんな社会やコミュニティをつくりたいのか、どんな生き方をしたいのかが、学生たちの得た課題です。カフェで、列車内で、飛行機の中で、いろいろと議論し、反発し、納得しました。そのことを今後にかかしてほしいと思います。スタディーツアーの最後の日程は、シェークスピアのグローブシアターに立って、16世紀を生きた人々の日常生活に思いをはせ、そこから、21世紀の最先端の技術で造られたミレニアム・ブリッジを踏みしめながらイギリスに別れを告げることになりました。「人」に焦点を当てた今回の旅は、21世紀にふさわしい市民型社会のありようを考える好機会になったと思います。



リーズ大学でイギリス人学生と語り合う

イギリスの大学生との交流

このスタディーツアーで初めて同年代の学生と交流することができた。彼らはリーズ大学の学生で、一ヶ月前に入学したばかりで自分と同学年の学生や、日本に留学経験を持つ学生の授業も参観しました。ディスカッションの授業では、日本の授業を受けている私たちに一言も発言することができませんでした。英語力の不足を別にして考えても、あれほどの活発な発言についていける自信はなく、しかもディスカッションのテーマが「日本の戦争責任」についてであり、日本人である自分たちの勉強不足を痛感させられました。そのほかに、日本語の授業参観でも、授業中の発言はすべて日本語が使われていることも、日本の授業と大きく違っていました。日本の語学の授業に日本語を使っていることについて考えさせられました。

日本の学生と比べてみると、勉強に対する姿勢が熱心だと感じました。また、ひとつの分野に偏ることなくさまざまな方面の知識を広げることが一般的であるようでした。このスタディーツアーに参加して今後の自分の大学生活を考えなおす良ききっかけになったと思います。(徳本 絢)



番外

フランスの大学院生と張り切っている。

ジャン・バティスト・トラ シュパンさん(25)が、山口市の県立大にインターン(職場研修生)として来県し、大学に事務局

携する横浜国立大で経営学などを学んだ。長期滞在を希望したため、ポアチエ大学のインターン制度の日本側窓口であり、EU協会事務局を担う助教授の紹介で8月末に山口へやって来た。

「日本のアニメが大好きな放映され、私もよく見ていた。日本文化には

忙しい都会に比べ、山口は誰もがゆったりとした雰囲気を持っている。地域によって違う日本の生活ぶりを味わえてよかったです」と山口での生活が気に入った様子だ。

今月から新事務局に常駐し、EUに関する政治、経済の資料収集を担当するほか、海外企業との交渉業務や翻訳などで協会員である県内企業の仕事を支援する予定になっている。

小川助教授は「せっかくの機会なので、彼からフランス語を学ぶサークル活動など、学生との交流も積極的に進めていきたい」と話す。

【井本義親】

インターン

EUと山口の懸け橋に

を置く山口EU協会の一員として活動中だ。「EUと山口の懸け橋」となりたい

強い興味を持っていま「す」とトランシュパンさん。日本は子どものころから身近な存在だったという。

「横浜や東京のような移動作業が完了した。トランシュパンさんはインターン期間は来年2

月まで。「協会の仕事はもちろん、日本の生活自体も楽しむつもり。映画や漫画が好きなのでたくさん見てみたい。日本語の学習も頑張る」と意欲的だ。



山口EU協会で活動する県立大インターンのトランシュパンさん(左)



県立大助教授 小川秀樹

①

移転した山口EU協会(会長・岩田啓博県立大学長)にも参加することになった。
なぜ、私がEUのことにかかわるのか。私が20歳代の後半にベルギーに政府給費留学しており、EUのことについて多少心得があると学内で見られたからだろう。ルーヴアン・カトリック大学に

(10月下旬)、フランス人インターンの招待などがある。
前者は、ヨーロッパ統合の源流を追い求める歴史の旅となりそう。フランス王国の創始者シャルルマーニュ、アメリカにも及ぶ世界帝国を支配したカール5世などの残り香、残影を探り歩く予定だ。そうした残影が残る地は、すべて現在のベルギーなどベネルクス3国とその周辺に存在する。

後者は、私がここ数年いて山口EU協会の仕事間、フランスのポワチエもしてもらおうというも大学経営大学院生の日本の。会員企業に「1日助でのインターンシップにっ人」のような形で国際かかわっており、今年そ業務支援のため派遣するうちの一人を山口に招ことも考えている。

県立大に助教として赴任し半年が過ぎた。新米教員ゆえ、冷や汗をかきことも多かったが、無事、前期の授業を終了することができた。これま

ことが多かったこともあり、大学ではフィールドの視点からの国際関係論を講義している。それと並行して、力を入れてい

る。EU(欧

EU(欧州連合)

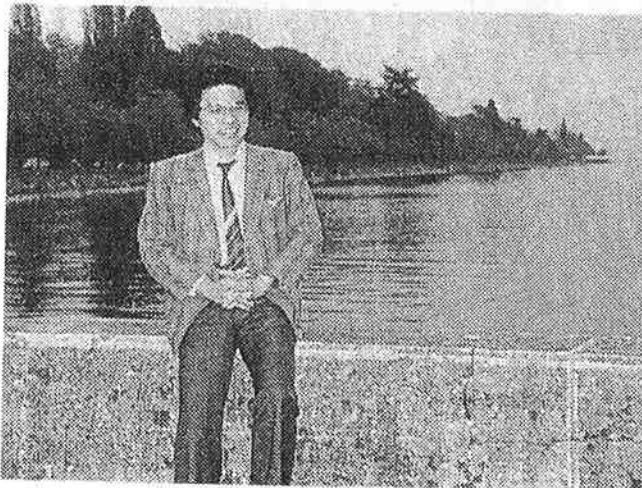
ザビエル縁につながり模索

で外国で多く州連合関連の仕事である。最近では紛争の現場にOD AやNGOの

研究生として籍を置き、EUの通商法について短い論文を書いたり、ベルギー関連の著書も出版したこともある。

山口の経済界もが、ヨーロッパEUとのつながりを模索しているのだ。山口EU協会が本年度に計画しているものな

筆者紹介 1956年生まれ。早大卒。外務省専門調査員やJICA派遣専門家、NGO活動などを経て、今年4月から県立大国際文化学部助教授(国際関係論)。



ベルギー留学時代の小川さん